



白黒

つけよう

くしろの酪農・畜産

酪農家の和牛子牛生産に向けた手引き

実践編

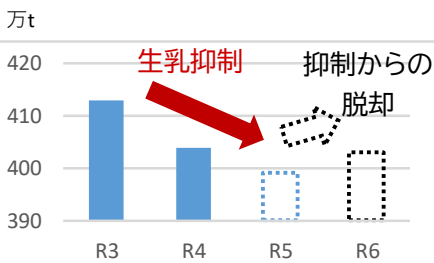
令和5年3月に発行した「入門編」は釧路総合振興局農務課HPで閲覧可能です。

※本取組の推進に向けた基本的な考え方は、入門編をご確認ください。

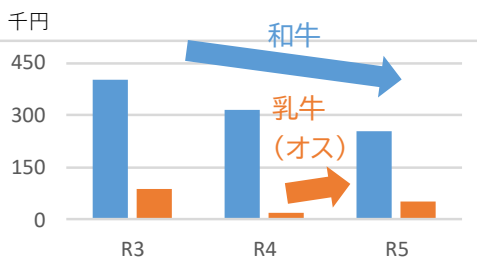
酪農を取り巻く情勢

情勢は刻々と変化しており、将来を見据えて経営方針を考える必要があります。

道内生乳生産量(ホクレン生乳受託実績)

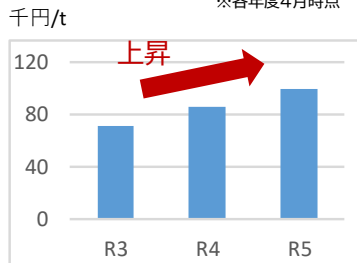


初生牛個体販売価格(道内市場実績)



配合飼料価格(飼料月報)

※各年度4月時点



乳牛への和牛受精卵移植の実践に向けて

ポイント

本取組では初生牛での出荷を想定しています。

和牛子牛の事故率はホルスタイン子牛より高いです。
飼養環境を再確認し、適切な管理で事故率低減を目指しましょう。

STEP1 搾乳牛の後継牛を確保しましょう

生乳生産基盤を維持しながら、和牛子牛生産に取り組みましょう。
性別別精液を活用するなど、効率よく後継牛を確保した上で個体販売用の牛を生産しましょう。

STEP2 移植する受精卵を決めましょう

血統は取引価格の重要な要素の一つです。

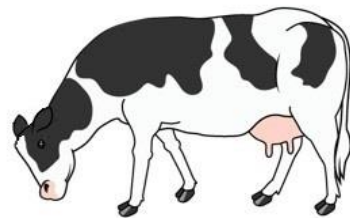
STEP3 母体となる乳牛を決めましょう

選定の考え方は様々です。最終ページに実践者の意見を紹介していますので、参考にしてください。

STEP4 分娩・ほ育環境を確認しましょう

出生してすぐの子牛を清潔に管理できる環境を用意しましょう。

STEP5 いざ、実践！



➡ 次ページ以降で、和牛子牛生産のポイントと事例をご紹介します。

発育良好な状態で出荷すること

そのために乳牛と同様に最も重要なこと

出生時に健全な子牛を確保する



…だから、ここは再確認したい

分娩場所の環境

- 母牛1頭あたり10~12㎡を確保する
- 敷料は、新生子牛のために十分な量を確保する
- 寒さや動物の侵入を防ぐ

必要な条件

母牛の安楽性 + 新生子牛に望ましい場所

出生当日の管理

- 病原体に無防備な新生子牛を衛生的環境に受け入れる
- 子牛を敷料・布で拭く、カーフウォーマーを使用する、湯洗いしドライヤーで乾かすなど、体温保持のため早く乾かし、冷やさない
- 出生6時間以内に初乳をできるだけ多く飲ませる
- 速やかにヨード剤でへその消毒する



子牛を

乾かす
汚さない
冷やさない

子牛管理の実践例

「乾かす・汚さない・冷やさない」を出生から出荷まで維持しましょう。

カーフウォーマー



娩出直後の子牛を乾かして保温する

分娩房のヒーターボックス設置



子牛を湯洗いする容器



速やかに給湯機へ運ぶため常備

ビニールの防寒ハッチ



出生当日から屋外管理が可能

1日2回の敷料交換



牛床を乾燥させ牛体衛生を保つ

搾乳牛舎の改造で管理房設置



既存施設の活用でスペース確保

受精卵移植生産の和牛子牛ほ育の事例

酪農基盤を活かした和牛生産プロジェクトチーム(令和4年度設置)対象農家4戸の調査

管理作業について



- ・ほ育日数:概ね45~60日(市場出荷まで)
- ・ほ乳方法:乳首ほ育がほとんどだが、発育が順調ならバケツ移行するケースもある
- ・1日ほ乳回数:2回~4回
また、発酵乳を使っている、スタータ給与をしていないケースもあるなど農場によって管理方法は様々

*調査農場では、出生直後の新生子牛を湯洗いでドライヤーで乾かし、さらに通年でカーブウォーマーを利用するなどの対応を行っていた

ミルクの給与について

- ・全戸で和牛専用ミルクを使用
- ・最大ほ乳時の1日量は、粉ミルクの粉の量で約1,000g給与
- ・希釈倍率は、銘柄によるメーカー推奨の範囲内で調製

発育

対象農家の体測結果では、13頭の測定で発育標準に達しない個体はいなかった。概ね順調な発育であったといえる。

令和5年出荷牛3頭の発育を発育標準の日増体と比較します



個体	性別	日齢(日)	体重(kg)	日増体(kg)	種雄牛名号	母の父名号
①	雄	47	64	1.36	安福久	勝忠平
②	雄	48	63	1.31	安福久	幸紀雄
③	雌	52	69	1.33	福之姫	安福久
発育標準	雄	60.8日 (2ヶ月齢)	78.2	1.29	1ヶ月を30.4日として2ヶ月齢を日齢換算し、黒毛和種発育標準の平均体重の日増体を算出	
	雌		65.1	1.07		

◇調査結果から

- ・順調な発育には、出生当日の子牛を「乾かす・汚さない・冷やさない」管理と和牛専用ミルクを適切に給与することが重要です。
- ・販売価格は、血統にも影響されます。最新の市場情報から評価の高い種雄牛を父とする受精卵をよく検討して選ぶ必要があります。

母体となる乳牛の選定について

- ・高価な受精卵を無駄にしたいくないので、発情の良い牛や若い牛を選定する
- ・ゲノム価が低い、乳房炎牛など農場に血統を残したくない牛を選定する
- ・牛はとくに選ばない

移植を何回まで試みるか

- ・2~3回

移植のための管理作業で手間のかかること

- ・特に手間は感じない
- ・通常授精とタイミングが違うが、プログラム通りに行うだけ

実践する上で注意すべきこと

- ・環境の不備による新生子牛やほ育子牛のへい死
- ・寒冷対策が徹底できない事で、冬期間の分娩が心配される
- ・受精卵移植に係る経費は高価なので、本当に利益があるかを計算する
- ・移植師と密な連携が必要



考え方は様々ですので、経営方針に合わせた判断が必要です。

今後取り組む方へ

乳牛への受精卵移植による和牛子牛生産は、酪農家が所得向上する手段の一つとなりますが、高額な費用を伴うので、経営へのリスクも発生します。

事前に十分な検討をした上で実施してください。

【考えられるリスク】

○ 子牛のへい死

- ・分娩・ほ育の環境に問題があれば、和牛子牛は乳牛子牛より事故率が高くなる
- ・寒冷対策が十分でない場合は、冬期間の分娩で子牛を失う可能性がある
- ・和牛子牛は、乳牛子牛より体調変化がわかりにくい

和牛子牛は、乳牛子牛より丁寧な対応が必要です。



○ 実施による損失の可能性

- ・何らかの原因で出生した和牛子牛を十分に発育させられない
- ・血統や登録上の条件に関する情報不足から、市場性の低い牛を生産してしまう
- ・酪農情勢や和牛販売価格動向によって、利益は大きく変動する

飼養管理技術に関しては、地域の普及センターにご相談ください。

本パンフレットに関するお問い合わせ先

釧路総合振興局産業振興部農務課生産振興係

TEL 0154-43-9224

釧路総合振興局釧路農業改良普及センター

TEL 015-485-2514